

京人形いろいろ

江戸時代には、雛人形のほかに、さまざまな人形が誕生しました。その多くは、ここ京都が発祥の地と考えられています。



御所人形 桃持ち 京都国立博物館蔵

嵯峨人形 さかへにんぎょう

木彫りを基体に、衣裳の文様を胡粉で厚く盛り上げ、極彩色を施した人形。年月の経過もあって色調は重く沈んでしまっていますが、かわいらしいだけではない深遠な表情と相まって、独特な魅力をたたえています。御所人形のように子どもの姿をうつした裸嵯峨、からくりが仕組みられたからくり嵯峨が、初期のものと考えられています。



嵯峨人形 唐子立姿 京都国立博物館蔵

御所人形 ごしょにんぎょう

木彫りに胡粉を塗り重ね、三頭身のあどけない幼児の姿を映した人形です。明治時代以前には、その白く美しい肌から白菊、あるいは白肉人形、頭の大きなところから頭大人形、扱った人形問屋の名前から伊豆蔵人形などと呼ばれていました。御所人形には「見立て」と称し、童子の姿でありながら、故事人物をあらわす一群があります。英雄や賢者に見立てた人形に、子どもの健やかな成長と栄達が重ねられたのでしょう。



賀茂人形 雀踊り 京都国立博物館蔵

賀茂人形 かもにんぎょう

柳や黄楊を素材に、顔や手足は木地を生かし、衣服には縮緬や金襴などの裂を木目込んだ人形。その技法から木目込人形とも呼ばれます。こまやかな刀さばきをみせる顔と、着衣の裂とが調和し、素朴な味わいがあります。賀茂人形の主題は多様ですが、いずれも明るく楽しい表情に満ちています。

衣裳人形 いしやうにんぎょう

衣服の着せ替えができず、衣裳をまとった胴体に、頭部や手先を加えた形式の人形。子どものかわいらしいしぐさを写したものや、婦女・遊女・若衆などの風俗を写した浮世人形などがあります。浮世人形は、髪形や衣服などに往時の風俗がうかがえ、風俗史の面からも重要です。



衣裳人形 婦女立姿 入江西一郎氏寄贈 京都国立博物館蔵

京人形を楽しむための鑑賞ガイド

雛まつり 人形

雛人形を飾って女子の成長を祝う雛まつりは、古くから行われていたように思われがちですが、人形を飾ってこの日を祝うようになったのは、江戸時代の初めとされています。

雛まつりの起源は上巳じょうしの節供という、三月のはじめに行われる禊みそぎの行事です。紙など簡素な素材で作られた人形ひとがたは、人間の形代かたしろとして穢けがれを引き受け水に流されるなどしましたが、やがて、同じく三月三日頃に公家の女子たちが行っていた雛遊ひなあそびびとも結びつき、江戸時代には飾るための豪華な人形へと変化していきました。

当時の雛人形には、その時代の元号を冠して呼ばれる寛永雛・享保雛や、製作した人形師の名を付けたという次郎左衛門雛、江戸で誕生した古今雛、公家の装束を正しく写した有職雛などがあります。各種の雛人形が勢ぞろいする展示では、面差し、手の動き、装束など、それぞれに異なる細部に注目して、雛人形の変遷をご覧ください。



有職立雛 京都国立博物館蔵

特集陳列 雛まつりと人形
2015年2月21日(土) - 4月7日(火)
平成知新館 特別展示室(1F-2)

京都国立博物館 京都市東山区茶屋町 527
075-525-2473 (テレホンサービス) <http://www.kyohaku.go.jp/>

長い年月を生きている人形には、汚れや傷みがありますが、人形の重ねた歴史の重みとしてご鑑賞ください。

雛飾りの東西

雛まつりといえば、内裏雛に三人官女、五人囃子などの人形に加え、たくさんのおもちゃが幾段にも並べられた、雛段の光景が思い浮かびます。

この豪華な「段飾り」は、江戸時代の終わり、華やかな武家の雛飾りにならって、江戸（現在の東京）で完成したと言われています。江戸では、町人の女子が武家の奥向きに奉公していましたが、雛の節供には、近親者も屋敷の雛飾りを拝見することが許されました。大名家の雛道具には、姫君の婚礼道具と文様も製作技法もまったく同じで、婚礼道具の縮小版ともいえる豪華な品が見られます。このように華やかな雛道具を加えた飾り方が町方にも影響を与え、「段飾り」が完成したと考えられています。

それでは京都や大坂といった上方（現在の関西地方）ではどんな飾り方がされていたのでしょうか。上方では「御殿飾り」、つまり内裏雛が住まう御殿を最上段に置くのが一般的でした。雛段は二段程度で、雛道具も少なく、江戸ではまず見られないおくどさん（台所）や調理道具が加えられていました。

江戸時代の終わりに上方に生まれ、後に江戸で暮らした喜田川守貞の『守貞漫稿』には、上方の雛飾りは江戸よりも質素で洗練されていないように見えるけれど、これは女子に家事を習わせるためだ、と記されています。

男雛と女雛

右と左の不思議

男雛と女雛の正しい並べ方はよく話題になりますが、左右両説とも根拠があり、どちらが正しいとは言えないようです。

内裏雛は、天皇と皇后の姿がお手本ですから、日本の伝統的な宮中の席次に従えば、向かって右は男雛、左は女雛となります。そのため、伝統を重んじる関西地方では、現在でもこの並べ方が主流です。

しかし、明治時代を迎え、宮中に西洋式の儀礼が導入されると、男女の占める位置が逆になりました。そのため、現在の皇室の規定に従えば、向かって右は女雛、左は男雛となります。

一説には、昭和天皇の即位式の際に撮影された写真を参考に、東京の形業界が雛人形の左右を置き換えたことに端を発し、この並べ方が関東を中心に広まったと言われています。



立雛（次郎左衛門頭） 京都国立博物館蔵

立雛

三月三日に人形を飾る雛まつりの始まりとして、人間のけがれを木や紙でできた人形に移し、川や海へ流す祓いの行事があります。自立できない立雛は、けがれを移す人形から発展したと考えられ、飾ることを目的としていなかった初期の形式を伝えています。

寛永雛

江戸時代前期（17世紀）の古風な雛人形。高さは10cmほどで、坐雛の初期の例のひとつ。男雛は頭と冠を一緒につくり、髪の毛と冠は墨塗り。女雛は両手を開き手先をつくらず、小袖を袴に着込めます。



寛永雛

古式享保雛（元禄雛）

寛永雛よりもやや大きな坐雛。男雛は寛永雛とほとんど変わりません。女雛には手先がつき、装束も十二単風の襲装束になります。



古式享保雛（元禄雛） 京都国立博物館蔵

享保雛

江戸時代中期（18世紀）に町方で大流行し、その後も長くつくり続けられた雛人形。面長で端正な顔立ちで、50cmにもおよぶ大きなものもあります。毛髪は毛植になり、女雛は十二単風の装束に天冠をかぶります。



享保雛 京都国立博物館蔵

さまざま雛人形

時代とともにさまざまに変化してきた雛人形。頭づくりや手の動きなど、細部にご注目ください。

江戸時代

[寛永年間]
(1624~1643)

[元禄年間]
(1688~1703)

[享保年間]
(1716~1735)

[安永年間]
(1772~81)

明治時代

* 雛人形の名前についた時代名は、製作年代と必ずしも一致しません。

次郎左衛門雛

京都の人形師・雛屋次郎左衛門がつくり始めたと言われる人形。18世紀後半には製作されていたようです。丸顔に引目・かぎ鼻・おちょぼ口のおっとりした面貌で、大名家や、公家の子女らが入寺する門跡尼寺に伝えられる作品もあります。



次郎左衛門雛 入江西一郎氏寄贈・京都国立博物館蔵

古今雛

江戸生まれの坐雛で、二代目・原舟月が完成した現在の雛人形の原形。安永年間（1772~81）からつくられ始め、江戸の流行を受けて京都でも製作されるようになりました。実際の公家の装束にならうものの、女雛の天冠や袖口の刺繍など、より豪華に仕立てられています。主に町方で飾られました。



古今雛 玉城芳江氏寄贈・京都国立博物館蔵

有職雛

装束に明るい公家の監修のもと、公家や武家のために製作された特別注文の雛人形。有職とは、宮中にまつわる伝統的な儀式や行事にともなう知識をいいます。髪型・装束の色目・文様など、忠実に公家の装束を再現しようとするのが特徴です。



有職立雛 京都国立博物館蔵

関西の御殿飾りの特徴であるおくどさんと台所道具

御殿飾り雛（明治9年） 木村進一氏寄贈・京都国立博物館蔵